

相談室だより 2015年6月

吉野地区地域包括支援センター 緒方弘征

ずいぶんとお久しぶりです。吉野地区地域包括支援センターのソーシャルワーカー緒方です。2012年10月から吉野地区地域包括支援センターで勤務しています。今年5月に「やねだん」の研修に行ってきましたので、その報告をいたします。

「やねだん」って、なに？どこ？

「やねだん」とは、鹿児島県大隅半島のほぼ中央に位置する鹿屋市串良町柳谷地区、地元の人々は「やねだん」と呼ぶ120世帯およそ300人が共存する、高齢化が進む典型的な中山間地域の集落です。

この集落がアイデアあふれるリーダー豊重さんの下、子ども達から高齢者まで強い絆で結ばれ、土着菌堆肥からサツマイモ栽培そしてオリジナル焼酎開発、トウガラシ栽培からコチュジャン開発など集団営農から6次産業化を推進、集落の独自財源を築き、高齢者には年1万円のボーナスが支給され、全国的に注目されるようになりました。

「やねだん」には、日本はもちろん韓国、ベトナムなどアジアの国々から年間5000人にも及ぶ視察者が訪れています。

「やねだん」研修へのきっかけ

6年前より、「やねだん」の存在は、市内のソーシャルワーカーを通じて、知っていました。その時は「本当に、こんな集落があるのかなあ」と半信半疑でした。その後、東日本大震災の大牟田の取組「プロジェクトおおむた」に参加しました。活動の地であった南三陸でも、地域創生というキーワードで、「やねだん・豊重さん」のことが話題になっておりました。その後、市内のソーシャルワーカーの仲間や、「プロジェクトおおむた」の仲間が「やねだん」の故郷創生塾に行ったことも知りました。行った仲間からは「緒方さん、あれは研修というより“修行”だよ。でも、行かないや分からないことがあるよ」と聞き、「いつかは行かなければ・・・」と思い始めました。しかし、「3泊4日の研修、休みとれるかな。研修費6万円。。。高いなあ。」行かない理由は、いくらでもありました。それに対し、行く理由・動機は「なんとなく、行けば自分が変わるかな」というもので、何年も行く機会があったものの、行動には移さないままでした。地域包括の仕事においても、一步を踏み出すことに悩む自分がいました。ここに、やねだん研修のきっかけがありました。「すぐに行動しない自分を変えたい」「地域での一步を踏み出したい」これが、きっかけでした。

「やねだん」での3泊4日

噂通り、研修というよりは修行でした。朝8時から深夜2～3時までの講義、それから名刺交換に懇親会、睡眠時間は2～3時間。しかも、寝る場所は迎賓館と呼ばれる空き家を改築した家に雑魚寝。参加者は68名、過疎化などで悩む自治体公務員や介護職の方が大半を占めていました。初日、豊重塾長が、「I can do it!」と、この4日間で何が出来るのか、どう変

わるのかと問われました。同時に、豊重塾長の出来ることとして、「4日間で68名の顔とフルネームを覚える」と宣言されました(ホントに覚えられたのにはビックリでした)。「教育とはわかることそのものだ」と、4日間でどう変わりたいのかより具体的に目標を決めることが大事だと強烈なメッセージを頂きました。

「やねだん」で学んだもの

一言でいえば、「リーダー論」です。当たり前のことを当たり前にする事です。

- ・何かするときは、まず、自分が行動する。
- ・人の名前を覚える。
- ・感謝をする。
- ・気配り・目配り・心配りをする。
- ・姿勢を正す。

などの日常を丁寧に生きるということ、講義・やねだんでの生活を通じ、体感しました。

次のステップでは地域の理解と地域へのアクションです。著明な講師陣から「やねだん」の子どもからお年寄り、はたまた「やねだん」の自然まで、みんなが先生でした。

- ・まちづくりとは
- ・財務とは
- ・イノベーションとは
- ・まちの分析力、課題解決力とは
- ・地域リーダーとは、地域コーディネーターとは
- ・アグリビジネスとは

- ・共生とは

など、地域に関するさまざまなことを多層多様な人々から学びました。

また、人・自然は、「誰にとっても等しく大事なもので」「社会にとっての共通の財産」ということも学びました。私に置き換えると、医療・福祉・介護もその一つと思います。

これから

医療人として、この研修を大牟田の地で活かしていきます。人口が減っても、幸せなまち＝住民が生き生きと暮らしているまちを、地域の住民の方々と一緒に汗したいと思います。

具体的には、まずは担当校区の誇れるもの探し・歴史の紐解き、地域分析から始めていきます。そして、今年度中に地域の皆さんと地域の事業所で、まちづくり・くらしに関するワークショップを開催します!。

